

八重地の棚田

八重地の棚田は、上勝の最西部にある山地の奥深くに位置します。これらの棚田は 468 枚の水田のネットワークを構成しており、それぞれの水田は約 250 平方メートルの面積を持っています。この棚田は、歴史的景観の保全と高齢化する人口の課題を両立させてきた、変わることのない遺産を代表しています。

変わらない風景

八重地は、観光バスや人混みとは縁のない、歴史を色濃く残す静かな隠れ家であり続けています。1813 年の八重地の地図に見られる 42 棟の民家のうち、田中家住宅や花野邸などを含む計 34 棟が、2011 年の時点でまだ同じ場所に建っていました。細い道や路地を散策すると、石垣に囲われた民家はもちろん、長楽寺や石碑、また多くの神社の風景を楽しむことができます。実際、この小さな集落には 22 もの神社があり、山の神、水の神、農業の神を祭っています。これらの神々は人々の生活を守り、また神々に捧げられた神社の数の多さは、この地域の農家の人々にとってこれらの守り神がどれほど重要かを物語っています。

自然との調和

これらの棚田は高丸山の斜面の低いところ、標高 550 メートルから 650 メートルの間の帯状の部分にあります。山の上部では、ブナ林に降った雨が土壌に保持され、八重地の田畑に流れ下る水源を養っています。このようにして森林は農業に不可欠な水を供給し、ひいては人々の生活を維持するのに役立っています。また、八重地はメジロ (*Zosterops japonicus*) をはじめとする様々な動植物に生息地を提供しています。このような利益が調和したアプローチは全国的に評価されています。八重地の棚田と高丸山は、2009 年に環境省によって重要里地里山に指定されました。里地里山とは、集落と、二次林、水田、および用水路との間の相互関係と、生物多様性の保全に重要な役割を果たしていることによって特徴付けられます。

曲線型棚田

元々の水田の形状は小さく不規則で、農業機械の使用には不向きでした。手作業での耕作が必須であり、労働力人口の減少に対応する農家の負担をさらに増大させていました。1998 年に徳島県は機械化を可能にするため、地元の八重地のコミュニティの了承を得て、水田を整備してより大きな長方形のものにする計画を採択しました。しかし、この計画は伝統的な景観の喪失につながるのではないかと懸念が表明されました。そこで徳島県はもう一つの計画 – 曲線型棚田の景観美を保ちつつ、耕作効率を高めるという先駆的なほ場整備モデル – を提案しました。詳しくは「八重地ほ場整備事業」をご覧ください。